

## 「死も、命も」

世の中には、「他人の空似」ということがあります。全然、血縁もない全くの他人が偶然にもそっくりな顔立ちをしている、ということがあります。宗教や文化人類学とか、その辺りのことを調べていますと、この「他人の空似」的な出来事が、けっこう出てきます。誰かと誰かの顔立ちが似ているということではなく、全然関係ないように思える、宗教や文化の間で、とても良く似た伝承があるということです。例えば、ギリシャ神話に登場する知力や芸術を司る女性神アテナ、仏教の祖である釈迦の母親マヤ、そして、我らが救い主であるイエス・キリストの母マリア。この3人の女性と女性神には、一つ共通する部分があります。それは、いずれも「生物学的な妊娠・出産を経験していない」ということです。ギリシャ神話に出て来るアテナという女性神は、父親あるゼウスの頭から生まれました。アテナの母親は、メティスという知恵と思慮を司る女性神でしたが、まあ、色々ありまして、夫であるゼウスに食べられてしまいます。・・・詳しくは、ギリシャ神話を読んでみてください。しかし、メティスは、ゼウスに食べられる前に、アテナを身ごもっていました。そして、アテナを身ごもった妻メティスを飲み込んだゼウスは、ある日、ひどい頭痛に襲われます。その頭痛があまりにも酷いので、とうとう頭を斧で割ってみるという暴挙に出まして、その割った傷口から、アテナが生まれたのだと言われていました。つまり、女性神アテナは、通常の生物学的な出生・出産を経っていない、ということですね。次の事例として、釈迦の母であるマヤについてです。マヤは、ある夜、一頭の白い像が自分の右の脇腹に入ってくるという夢を見ました。その翌日、マヤは釈迦を身ごもったことを知り、その同じ日に、マヤは右の脇の下から釈迦を出産したと言われていました。このブツダ誕生の伝承は、ギリシャ神話のアテナ同様、超自然的な出生の伝承として知

られています。ちなみに、生まれてすぐに釈迦は、七歩歩き「天上天下唯我独尊」と言ったんだそうです。ここに出て来る7と言う数字も、なんだか宗教と文化を超えていそうですね。そして、最後、我々がイエス・キリストの誕生について。言わずもがな、超自然的な出生ですね。「受胎告知」と「処女懐胎」。イエス様も普通の生物学的な御降誕ではありませんでした。このような、文化・宗教を超えた「他人の空似」的な信仰や伝承というのは、何か繋がりがあるのか、背景があるのか。調べてみると面白いかも知れません。

心理学の研究者として有名なグスタフ・ユングは、人間には「集合的無意識」という脳内領域があるんだと唱えました。そして、その「集合的無意識」という脳内領域で、人間は、時間と空間を超えて同じようなイメージを共有していると言いました。つまり、ユングさんの考えに従うなら、我々人間は文化や時代が違えど、「集合的無意識」によって、同じような伝承や信仰を共有しているってことですね。だから、ギリシャ神話におけるアテナ誕生、仏教におけるブツダ誕生、キリスト教におけるイエス様ご誕生が、多くの共通する部分を持ちながら伝承されているということになるんだ、と。そんな風に考えることもできます。

ただ、そんな風に考えるのは、ちょっと、聖書の御言葉を信じる私たちにとっては、嬉しくないかも知れません。でも、人類の知識の積み重ねを、とりあえず受け取るのは大事な姿勢です。私たちは、人類の英知を、生活のあらゆる場面で有り難く頂戴しているわけですから、文化的、宗教的、哲学的な部分だけ拒絶するのは、道理に合いません。尊い聖句も、預言者の叫びも、イエス様の御声も、もしかしたら、他の文化や宗教と繋がっているのかも知れない。となれば、キリスト教独自の有り難さが損なわれる可能性もある。でも、そここのところをちゃんと理解した上でこそ、新たに響いてくる福音もあると思います。たとえ、どんな言説や伝承があったとしても、私たちは神様がくださる御言葉の確かさを信じるが故に、この騒がしい世の中にあっても、神様の御声に耳を傾け

るのです。

今日の聖書箇所である、民数記 21 章 4～9 節も、実は、ギリシャ神話の伝承と、とてもよく似ています。ギリシャ神話に登場する男性神であるアスクレピオスは、医術の神として知られていました。この医術の神であるアスクレピオスは、蛇の巻き付いた杖を、持っていました。アスクレピオスの持っている蛇の巻き付いた杖、通称、「アスクレピオスの杖」は、医療・救命の象徴として伝承されており、現代日本でも掲げられています。調べてみますと、敦賀市の所有する救急車の車体にも、この「アスクレピオスの杖」のマークが描かれていました。ちょっと小さいですけど、車体の上の、赤色灯のあたりにあります。青い三本線が交差している下地の、その中央に、蛇の巻き付いた杖が描かれていますので、また、ご確認頂ければと思います。この「アスクレピオスの杖」に巻き付いている蛇は、再生と永遠の命の象徴だそうで、その辺りの理解は、イブとアダムを唆したとされる創世記における蛇の伝承とは、かなり違っています。でも、今日の聖書箇所に出て来る「青銅の蛇」のお話とは、よく似ていますよね。神様に不平不満を訴える民衆が、神様の怒りに触れてしまい、炎の蛇によって命を落としていた。そこで、モーセは民衆と神様との間に立って執り成しの祈りを捧げると、神様から「蛇を作って、旗竿の先に掲げよ」との御言葉を受け取り、青銅で蛇を形作り旗竿に掲げたならば、「炎の蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た」のだ、と。「旗竿の先につけた青銅の蛇が、民衆の命を救った」というのが、今回の聖書箇所の最も簡単な要約となります。杖と旗竿という若干の違いはありますが、要するに棒に巻き付いた蛇が、人の命を救ったという点では、「アスクレピオスの杖」と「青銅の蛇」の伝承は、非常に良く似ています。一応、色々、文献に当たって、調べてみましたが、聖書学的にも、歴史学的にも、この二つの伝承に直接的なつながりは、無さそうである、というのが、今のところの結論と言えます。でも、やっぱり、気になりますね。現代日本においても継承される「医術の神アスクレピオスの杖」

と、民数記が伝える民衆の命を救ったという青銅の蛇と。

「まあ、たまたま、そういう似たような感じになっただけじゃないか」と片付けることができますが。でも、私としては、そうやってしまうのは、ちょっと残念というか、惜しいというか。そもそものお話ですが、聖書の御言葉が、ギリシャ神話と似ているとか、仏教と似ているとか、心理学で解説されているとか、そういうことって、全部、私たちの信仰において「神様の御計画」の一部なんですよね。ちょっと、他の宗教や文化には失礼かも知れませんが。神様の導かれている歴史は、聖書に書かれている御言葉にだけ収まるわけじゃありません。神様の御計画、御心、これから為そうとされていること、これまでであったこと。それらは、聖書には記されている、記されていないに関わらず、全部、神様が導かれることです。神様は、この世界のあらゆる事象を用いて、私たちに語ろうとされています。例えば、これから、私たちは救急車を見るたびに、蛇の杖のマークを探すかも知れないですね。そして、人の命を救うために急ぐ救急車とそれに隊員たちの背後で、癒しの御業を準備される神様のお姿を思い起こすかも知れない。「アスクレピオスの杖」と「青銅の蛇」。この二つは他人の空似に過ぎないでしょうが、それでも今日の聖書箇所を思い起こすきっかけくらいにはなるでしょう。神様の御声に耳を傾けるって、ある意味、そういう小さな出来事に心を留めるってことだと、私は思っています。

では、今日の聖書箇所を、単体で読んでいきたいと思えます。まあ、説教って普通、そういうものなのですが、ちょっと、他の話が過ぎてしまいました。今日の聖書箇所は、出エジプトにおける出来事としては、「よくあること」でした。つまり、出エジプトの旅路、行程があまりにもしんどいから、民衆が不満を述べるということが起こります。「なぜ我々をエジプトから導き上ったのか」という訴えは、ここに書かれているだけじゃありません。神様は、そんな民衆に対して、怒りを発せられます。しかし、モーセが執り成しの祈りを捧げることで、神様の怒りは収まり、回復と救済

が与えられる、ということです。この回復と救済は、マナという食べ物であったり、岩の割れ目から迸る水であったりしますが、今回の場合、青銅の蛇ということになります。

今回の「青銅の蛇」の伝承で、興味深いのは、回復と救済をもたらす青銅の蛇に対して、民衆を苦しめ傷付けていたのは、炎の蛇だったということです。蛇が苦しめ、蛇が救うという構図があるわけですね。そして、その両方の蛇の背後には、どちらも神様がいらっしゃる。この信仰的な事実は、つまり、私たちに回復と救済を与える神様は、私たちに苦しみと死をもたらす方でもある、という古来の信仰理解を示しています。ヨブ記にも書かれている「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」という賛美にも、同じような信仰が込められています。私たちの神様は命や恵みを与えもするし、命や恵みを奪いもする。そういう方である、と。

ただ、出エジプトという出来事を、初めから終わりまで見てみると、それは全体的には回復と救済の物語です。神様は怒ったり、懲らしめたり、試練を与えたり、苦しめたりするけれど、最終的には、イスラエルの民を導いて行かれた。約束を果たされた。この古い伝承は、その全体を通して、神様の導かれる歴史の正しさと恵みを証ししています。私たちの日々の歩みも、常に順風満帆ではありません。蛇にかまれることは、まあ、そんなにならないと思いますが、アクシデントはつきものです。今日まで導いてくださった神様に、「なんで私をこんなところに連れて来たんですか」と文句を言いたくなることもあるかも知れません。でも、神様には神様の御計画があります。死も命も与えられる神様は、神様のやり方で、私たちを導き、試し、癒し、恵まれます。そのことを忘れないでいたいと思います。たとえ今が、試練の時、苦しみの時だとしても、青銅の蛇によって示された救済と回復は、すでに用意されているかも知れません。

「主は与え、主は奪う。しかし、主は最後に、恵みを残してくださる。主の御名はほめたたえら

れよ」。そんな信仰を胸に、今日から始まる1週間も、神様に頼って歩いて参りたいと願うものがあります。お祈りを致します。

神様。今日も私たちのために、尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。今日までの1週間、つらいことも嬉しいこともありました。あなたは、試練を与え、また、恵みを下さる方であると、改めて思われます。どうか、時が良くても悪くても、常にあなたを見上げて、あなたの救いを信じて、歩いてゆくことができますように。私たちをお守り、お導きください。また、私たちの毎日に、あなたの御声と御業が豊かに示されていることを知って、私たちが安らぎを受け取り、いよいよ信仰を増し加えることができますように。新たな週の一巡りが、あなたによる救いの約束と栄光とを表す日々となりますように。どうか1日1日を備え、支えていてください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

2月召天者を憶える祈り      聖書：ヨハネによる福音書14章1～3節

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

上田キヨ子 うえだ きよこ 姉 (2023年2月2日 召天)

松木 清 まつき きよし 兄 (1937年2月16日 召天)

山本 順 やまもと じゅん 兄 (2022年2月18日 召天)

谷口国夫 たにぐち くにお 兄 (1945年2月19日 召天)

中村弘子 なかむら ゆき 姉 (1999年2月20日 召天)

前 伊三雄 まえ いさお 兄 (2017年2月22日 召天)

中村ゆき なかむら ゆき 姉 (1995年2月26日 召天)

中野敏雄 なかの としお 兄 (2004年2月26日 召天)

中野好子 なかの よしこ 姉 (1968年2月28日 召天)

神様。私たちは今、2月にあなたへの御下へと召された兄弟姉妹を憶えて祈りを捧げています。

敬愛すべき信仰の先達のことを思う時、私たちの心はこの世を超えて、あなたの住まう天上にまで及びます。御国の幸いのただ中におられる方々は、必ずやあなたと共に永久の安らぎに身を委ねていると信じます。また、生前に各々成し遂げられた働きに対する十分な報いが天にはあることを信じます。そして、来る日には、私たちもまた天へと帰っていきます。主のご用意くださった場所において、再び相見える時、恥じることなくこの地上での働きをお伝えすることができるよう、どうか私たちの日々の生活と信仰とをあなたが守り導いてください。天には限りない平安がありますように、そして、地にはあなたによる力強い導きと、豊かな慰めをお与えください。

この祈りを我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。